OIDE 長姫 Topics

コンピュータ制御部『テックレンジャー』

信毎ヤンジャ で紹介

13 ヤンジャ 2022年（令和4年）9月18日 日曜日 信濃毎日新聞 第三種郵便物認可

1 ページ SHINMAI YOUNG JOURNAL 信毎ヤンジャ

情報はヤンジャ編集部
☎026-236-3215 メール yanja@shinmai.co.jp

7人が集合し、ポーズを決める練習をするテックレンジャー＝7月21日、飯田市の飯田ＯＩＤＥ長姫高校

飯田ＯＩＤＥ長姫高校（飯田市）のコンピュータ制御部員が演じる「高校戦隊テックレンジャー」が活動開始から13年目を迎えた。手作りの衣装をまとい、ヒーロー役が悪役を倒す子ども向けのショーを、近隣市町村のイベントなどで演じる。同校は2013年度、飯田工業高と飯田長姫高が統合して開校し、工業系と商業系の学科が共存する。ものづくりが得意、人前で話すのが得意―など、各部員が学びや個性を生かし、地域を元気にしたいと精力的に活動している。やりがいや地域への思いを「テックレッド」を演じる部長で３年の古瀬蒼太さん(18)に伝えてもらう。

飯田ＯＩＤＥ長姫高校「テックレンジャー」

「地域に元気を」つなぐ熱演13年

演じるコンピュータ制御部部長・古瀬蒼太さん 報告

手作りショー 部員の個性発揮

地球の平和を守るため、レッド、サファイア、エメラルドなど7人のテックレンジャーが宇宙人と戦うというのがショーのあらすじです。事前に収録、編集したせりふと音楽に合わせて演技をします。戦う場面だけでなく、いろいろなお客さんに楽しんでもらおうと、手品も披露しています。ドローンなど、さまざまな機械も使ってショーを盛り上げています。

統合前の飯田工業高校時代の2010年度に活動が始まりました。3年生が課題研究でヒーローのマスクを製作し、校内でショーを披露しました。コンピュータ制御部は元々二足歩行ロボットなどを研究していたそうですが、部活動としてショーを引き継ぎ、今はテックレンジャーの活動が中心です。ショー以外でも、地元をPRするCM作りに力を入れていて、地域で開かれる子ども対象の科学工作教室の手伝いもしています。

ショーなどを通して、地域を元気にしようと心がけています。子どもたちが楽しめる時間にし、親子で見に来てくれた思い出になればと思っています。「かっこいい」と思ってもらうのと同時に、飯田ＯＩＤＥ長姫高校の妥協しない「ものづくり」の精神を感じてもらいたいと思っています。

ヒーローや悪役が使う刀やおのといった武器は部員の手作りで、軽さと丈夫さを考慮し、住宅建築などでも使う素材を使っています。ショーの見せ場として、水素と酸素の爆発反応を利用した「テックバズーカ」を撃つ場面があります。そのバズーカやヒーローのマスク、衣装は、部内で代々受け継がれているものを使用しています。普段から修理や作り直しを小まめにし、本番で困らないように整備しています。

部員と練習を振り返る古瀬蒼太さん（左から２人目・撮影のため、マスクを外しています）

現在の部員は1～3年生の男女計10人です。学科は工業系6人、商業系4人で、各学科の特色も生かし、全員で協力して活動しています。ショーで使う小道具作りは工業系の部員が中心となります。CM制作では、取材相手へのインタビューは商業系の部員が中心に担い、主に工業系の部員が映像編集をします。小道具を作るのが得意な人、少しでも時間があると熱心に演技の練習をする人、子どもと話すのが得意な人など、個性的な仲間がいて、日々充実した活動をしています。

小、中学生の時にショーを見て、入学前から入ろうと決めていた部員もいます。私は小さい時にテレビで「戦隊もの」を見て、ヒーローへの憧れがありました。高校入学後にテックレンジャーを知って入部しました。演じているテックレッドはリーダー的な存在です。ヒーローらしく自信を持って行動することを意識しています。「これがうまくいかなかったらどう対処するか」を考えながら演技し、常に一番かっこよく見えるのは何かと問い続けています。

悪役（中央）と戦うテックレンジャーたち

地元をPRするCM作りにも力

地域住民と協力して地域を元気にするという思いは、発足時から代々引き継がれてきました。毎年、県警と提携してサイバー（電脳）犯罪防止を訴えるショーを披露したり、科学工作教室を開いたりしてきたことが評価され、2018年には、若者の地域貢献をたたえる「未来をつくる若者・オブ・ザ・イヤー」で最高賞の内閣総理大臣表彰を県内で初めて受けました。

地域のイベントに参加し、見に来てくれた人や立ち寄ってくれた人の期待に応えられるショーをすることが、呼んでくれた方々や、地域に対する恩返しだと思っています。

喜んでもらえる 一番のやりがい

新型コロナウイルスの流行でイベントが中止になり、テックレンジャーの活躍の機会は少なくなっています。コロナ前は年間20回ショーを開いたこともあったようですが、昨年度は10回、本年度は7月までに5回です。それでも、少ない機会に多くの人たちに楽しんでもらえるように、日々練習を重ねています。

ショー終了後、記念撮影をした子どもたちから「かっこよかった」「面白かった」と言ってもらえます。感想やお礼、応援を手紙やイラストで送ってもらえることもあります。子どもに喜んでもらえるのが一番のやりがいです。

演じる上では苦労もあります。衣装は通気性が高くなく、暑い時期は大変です。ショーのストーリーは顧問の先生と部員で話し合い、せりふや場面に合わせた動きを考えます。4月に原案ができ、5月には演じられるようにするため、短い期間で何回も練習します。戦いのシーンでは、かっこよくてスムーズな演技になるように、動きのタイミングを相手と合わせないといけません。

ショー以外でも地域を元気にすることを目指しています。コロナ下で苦労する飯田市内のイベントや飲食業者、菓子店などを取材してCMを作りました。コンテストへの応募を通じて、地元のPRにつなげたいと考えています。地元の人たちと接する中で、何が地域の人の役に立つかを考える機会が生まれ、地域活性化のためにどんなことができるのかも学んでいます。

信濃毎日新聞ホームページ転載許諾：shin2022-oide01